

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第三十四回）

なつみ  
「菜摘（夏実）の川（吉野川）」

奈良県吉野郡吉野町菜摘の里を流れる吉野川を「菜摘

（夏実）」の川名で万葉集に詠まれている。

なつみ  
かわよど  
1) 吉野にある 菜摘の川の 川淀に

かも  
やまかげ  
鴨ぞ鳴くなる 山陰にして

ゆはらのおほきみ  
作者 湯原王（卷三―三七五）

（解説）吉野の、菜摘の川の淀みで鳥が鳴いているが、あれはきつと鴨だ。ちようどあの山の陰あたりで。

①この歌の題詞は「湯原王、吉野にして作る歌一首」とある。

②作者・湯原王は第三十八代・天智天皇の孫、志貴皇子の子である。

③菜摘は飛鳥、奈良時代に離宮が置かれたと考えられている吉野町宮滝から吉野川を少しさかのぼったところが菜摘の里である。

しらゆふはな  
たぎ  
2) 山高み 白木綿花に 落ち激つ

なつみ  
かはと  
夏実の川門 見れば飽かぬかも

作者 未詳（卷九―一七三六）

〔解説〕 山が高いので白い木綿花のように白く波立って激しく流れる、夏実の川の川門はいくら見ても見飽きないことよ。

○「白木綿花に」は楮こうぞの繊維で作った白い木綿の造花のよう  
にの意。

○「川門」は川が狭くなっている通り路

○「夏実」は吉野郡吉野町菜摘の地をいう。

（参考文献）日本古典文学大系「万葉集」、新潮日本古典集成「万葉集」等

（写生地）

吉野町菜摘にある菜摘大橋近くの高台にある民家の庭から菜摘の山と山の北に迂回し、村の西側を西流しゆっくりと宮滝へと南下して流れる吉野川と菜摘の里を描く。（池田杏花）

